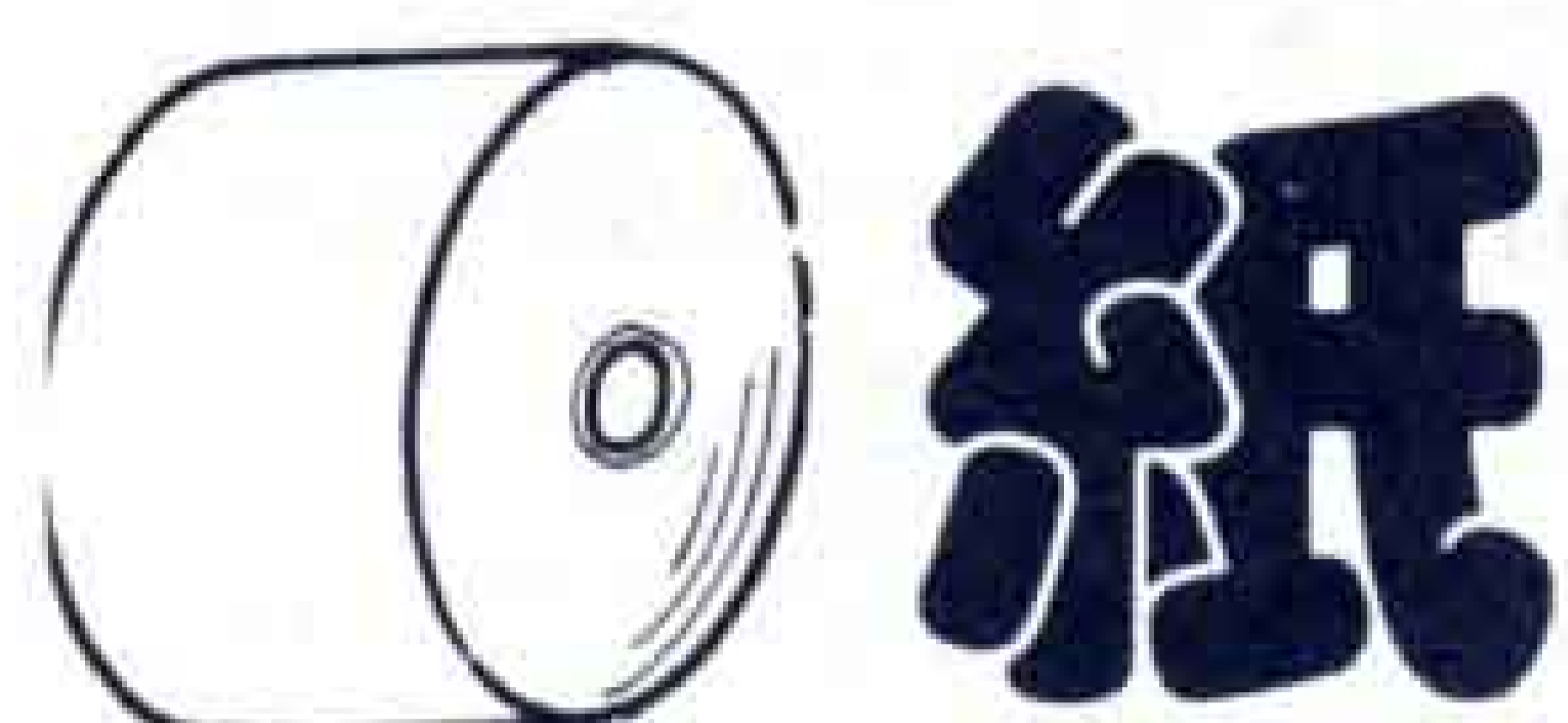


ふるさとのお話

わがまちの

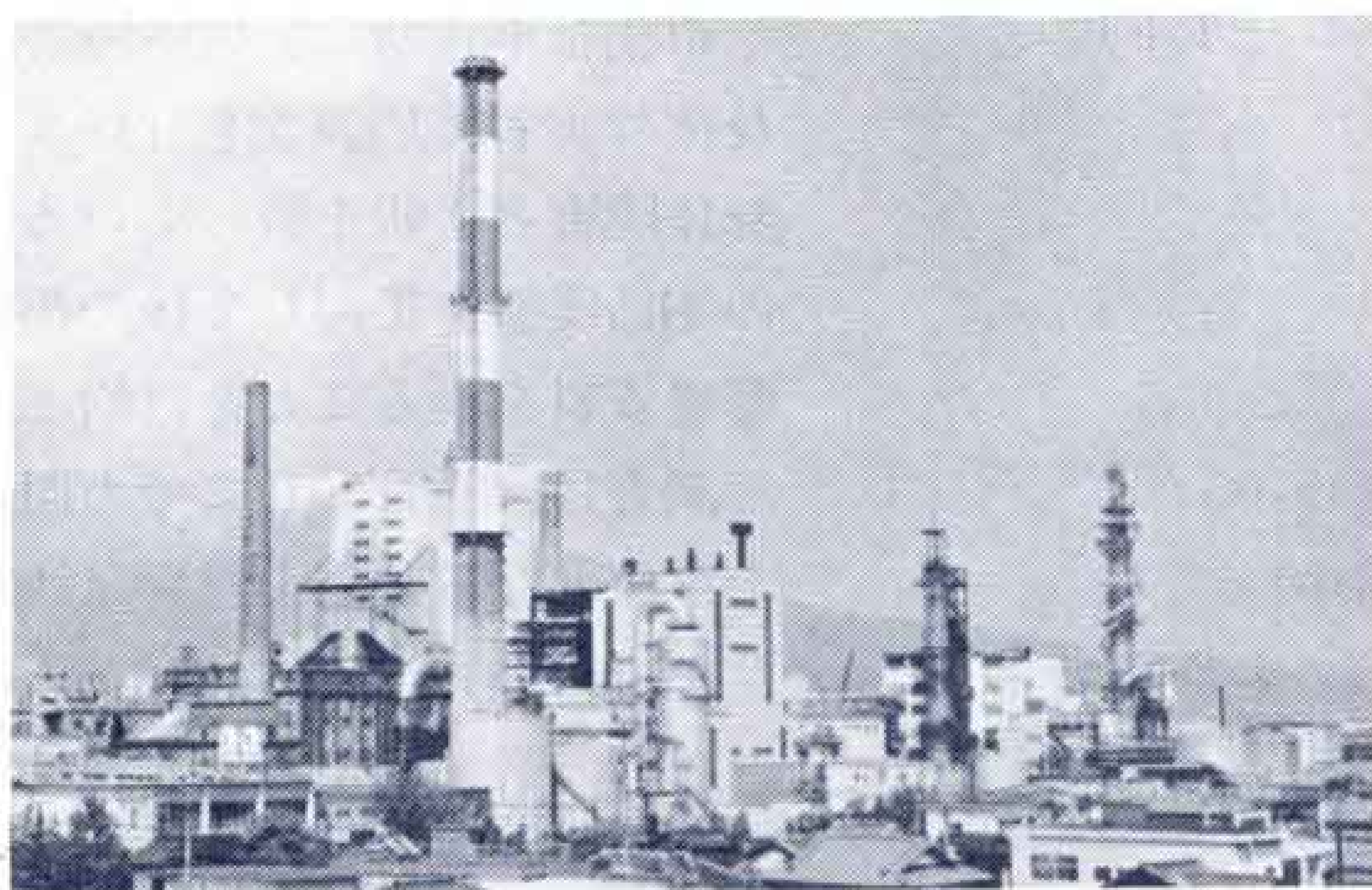


紙

のルーツ

その4

明治から昭和へ



〔現在の大製紙工場〕

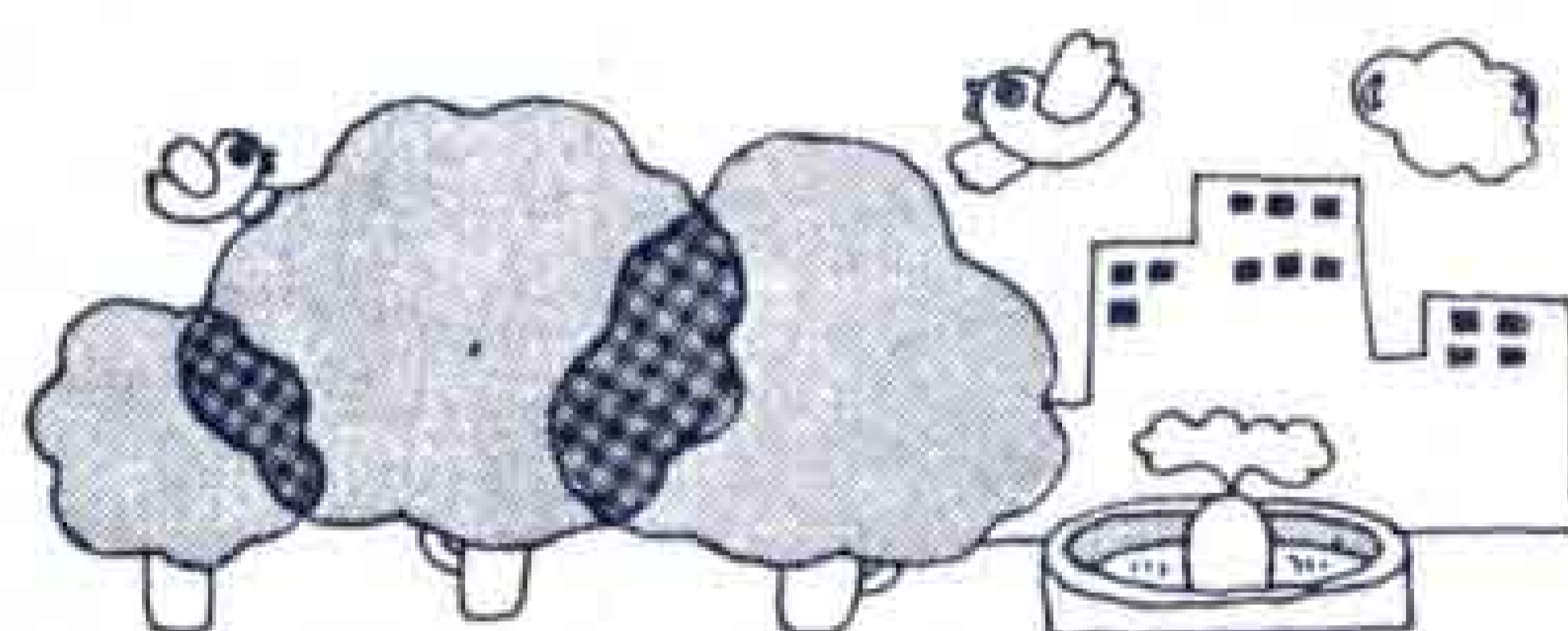
大正2年から9年までの8年間に県東部に誕生した製紙会社は30社でそのうち17社が吉原付近の会社でした。

大正末から昭和初期にかけて、国内の需要と輸出が増進し、製紙小工場の設立と、技術の向上はいつそうすすみました。大昭和製紙を創設した齋藤知一郎氏が製紙の経営に第1歩をふみ出したのも、この頃でした。

明治28年以降、地元資本による機械製紙工場が吉原地区を中心に設立されていきました。

はじめワラ・紙クズを原料とした半紙まがいの紙を抄いていましたが、互いに技術を競いあい外国製品にも劣らない紙をつくるようになっていきました。

大正3年第一次世界大戦がはじまると、日本の紙業界は空前の好景気になって、いつそう機械による抄和紙工場が続出しました。



これは抄く網に厚紙や針金などで型をつけておきます。抄く時、原料は網の上に平にのりますから、つけておいた型のところだけ原料がうすくのり、かわかすと白くすけて見えるのです。黒いのは、網にくぼみをつけておくのでその反対になります。

ミニ・メモ

紙のすかしはどうしてつくるか

紙を光にすかして見ると、人のかたちや景色など白くまたは黒くすけてみえるのが「すかし」です。

市立博物館 展示物 紹介



ないこうかもんきょう 内行花文鏡

鏡は、神話でいう三種神器(鏡・玉・剣)の中の一つで、古墳時代では最も大切な宝器でした。

昭和31年に東坂古墳から出土したこの内行花文鏡は、当地方が大和を中心とした勢力と結びついていたことを示す重要な資料です。



吉原宿の模型

吉原宿は、たび重なる津波や高波のために、三回(元吉原・中吉原・新吉原)場所がかわっています。江戸時代の終わりごろには、本陣・脇本陣・はたご屋などが120軒ほどあつてにぎわいました。



元吉原小学校3年 古屋真理さん

表紙のことば

日本脳炎の予防接種が、現在市内小学校2～3年生7,900人を対象に行われています。

この予防接種は、3歳から15歳までの間に最初の年に2回、翌年1回、以後4年ごとに受けることになっています。

この日5月27日は元吉原小学校でも行われました。接種を受けた同3年生古屋真理さんは、チョッピリ痛そうに顔をゆがめて「終ってほっとしました」と話してくれました。